様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２１　年　４　月　２３　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５３０５０６
研究課題名（和文）　子どもと大人における病気・健康の因果性の理解：　素朴生物学の視点から
研究課題名（英文）　Children’s and adults’ understanding of causality of illness and health: From a perspective of naïve biology

研究代表者
氏　　名（ローマ字）：稲垣　佳世子（INAGAKI KAYOKO）
所属機関・部局・職：千葉大学・教育学部・教授
研　究　者　番　号：９００９０２９０

研究分野：概念発達
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：素朴生物学、病気の因果性、概念発達、生気論的因果

１．研究計画の概要

本研究では、子どもと普通の大人が、病気と健康の因果性をどのように理解しているのかを、素朴生物学における生気論的因果の観点から検討することを目的とし、同時に生気論的因果の特徴をより明細化することをめざすものである。

従来のこの分野の研究では、西洋医学の見方を前提とし、もっぱら細菌説の立場から研究がなされていたため、幼児や低学年児童では細菌の生物学的理解はまでできないとの知見が強かった。しかし健康や病気の予防は、人類の生き延びに必須であるという進化論的視点から考えると、子どもが早くから病気や健康についての理解をもっている可能性がある。

そこで本研究では、細菌説とは異なる視点、すなわち素朴生物学における生気論的因果の視点から病気の因果性の理解の問題を検討しようとした。素朴生物学を特徴づけているのは生気論的因果ともいわれており、この因果の特徴をより明らかにしたいと考えたからである。

具体的には、主に次の点について検討することを目的とした。

(1)病気の抵抗力の理解に関して発病と病気の治癒における活力の役割を子どもや大人はどのように理解しているか。

(2)健康の基礎として、また活力源として、食べ物・栄養について子ども（と大人）はどのように捉えているか。

(3)子どものもつ「知識」への「インプット」として重要な位置を占めると思われる、子どもを持つ親は、日常生活場面で子どもにどのような言葉かけや説明をすることが多いか。

(4)普通の大人は、病気の因果性に関してどの程度、どのような形で生気論的な考え方を持っているか。

２．研究の進捗状況

罹病、病気の治癒、健康の因果性（とくに活力の役割）に関する子どもや大人の考えを明らかにするために、子ども（幼児）に対しては個別面接、大人に対しては主に質問紙により調査した。その結果次のことが明らかになった。

(1)幼児は摂食とともに他者の励ましも病気の回復に寄与すると考えていたが、同時に日頃のよい道徳的行動も病気の治癒を速めると考えていた。

しかし身体的・生物学的要因（例、摂食）と他者の励ましという心理的・共感的要因との間でどちらか一方を強制選択させると、身体的・生物学的要因の方が心理的・共感的要因より重要だとするが、心理的・共感的要因と道徳的要因の間での選択では心理的・共感的要因の方を重要視した。

(2) 栄養素の概念を持っている大人とちがって、幼児では食べ物の種類（野菜類、穀類、肉類、菓子類）にかかわらず、多量に食べた方が、少量しか食べない場合よりも成長が速く、病気にも罹りにくいとする傾向が一般的に非常に強い。

食べ物であれば野菜類、穀類、肉類のいずれでも健康（成長と病気への抵抗力）に同じような働きをすると考える子どもがいる一方で、同じような割合で、成長への寄与は、大きい方から順に、野菜、穀類、肉類という順番があり、大人と比べて、野菜類の（活力源としての）価値を過大評価する子どもがい

る。
(3)日常生活では親は、健康・病気に関する幼児の行為（例、食事を沢山残す）に対して、生活習慣上のしつけの問題として対処し、生物学的に詳しい説明をすることは少ない。
また親は幼児への言葉かけや説明に際して、「ばい菌」という用語はよく使うが、「ばい菌」がどのようなものかについての詳しい説明はほとんどしていない。さらに親自身の「細菌」の働きについての理解を調べたところ、その科学的理解はかなり低いものであった。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している
（理由）
本研究の目的としていることをこれまでの年度でおおむね達成している。子どもに対する個別面接による調査が、比較的順調に進んだことが大きい。

４．今後の研究の推進方策
(1)病気・健康の因果性についての子どもの考え方については比較的よく調査できたが、大人の考えについては、子どもとの比較において明らかになったことに限定されている。大人の考えをもう少しくわしく調べる必要がある。
(2)これまでの成果をまとめ、理論化する作業が必要である。細部の「詰め」の補充実験が必要となる場合もでてくる可能性があるので、それへの対処もするようにしたい。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　３　件）
(1) 稲垣佳世子　「幼児の栄養概念：生気論の視点から」　日本心理学会第７２回大会 2008 年 9 月 19 日　（北海道大学、札幌）
(2) 稲垣佳世子　「幼児における病気の抵抗力の理解：生気論的因果説明への選好」　日本心理学会第７１回大会　2007 年 9 月 19 日（東洋大学、東京）
(3) Inagaki, Kayoko & Oura, Yoko　“Young children’s understanding of illness causality: A role of vital power in recovery from illness.”　12th biennial Conference for Research on Learning and Instruction.　August 31, 2007 (Budapest, Hungary)